

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

木村 謹治・木内 トモ・横綱 照国

はじめに

平成24年度は、館話として、まず5月11日(金)「縄文文化を評価する」、同25日(金)「続縄文と東北の文化度」、6月8日(金)「国(くに)の語の語るところ」、同22日(金)「安藤昌益のことども」、7月6日(金)「平田篤胤と秋田」、同20日(金)「佐藤信淵の周辺」の、前期6回に続いて、ここに文章化して報告する、9月14日(金)「木村謹治」、同28日(金)「木内トモ」、10月12日(金)「横綱照国」の、3回を先覚の館話に当てた。11月16日(金)、同30日(金)、12月14日(金)の3回は、「菅江真澄」の『布伝能麻迹万珥』を扱った。

木村 謹治

明治22年(1889)1月2日、南秋田郡大川村大川に、松助とナヲの三男として誕生した。父は「対湖堂」と号した好学の士で、土蔵には充実した蔵書があった。素封家の鈴木家の子供は、10人兄弟の末弟が早世しただけで、5人も博士を輩出するような優秀さであった。親の子育てが良かったのであろう。15歳年の離れた弟の雄吉も生化学者で東京大学の教授になった。昭和3年東京大学理学部動物学科を卒業し、戦前には謹治の母校たる第二高等学校教授、終戦直後東京医科歯科大学教授を歴任、東大教授になったのは同24年である。後に横浜市立大学教授も務めた。

しかし謹治は幼い頃は身体も弱く、日本海から進んで来て八郎潟の上空に湧く雲さえ怖がるほどのおとなしさであった。この甘党だった幼児が次第に堂々たる人士に成長するには、卓抜した父親の教育方針の作用があったと受け止められる。

学齢に達し当然大川尋常高等小学校に入学するが、明治32年(1899)3月大川の小学校を卒業すると、そこの高等科に入るのではなく、離れた

下井河小学校高等科に進学するのである。

不思議にも思えるが、実は子弟教育に熱心な父の方針で、大川校で学校長だった大和田樗之助校長に謹治少年の訓育を委任してあったのである。そのことによって大和田校長の転任に伴い、校長宅に起居するため、家のある大川を離れ進学した訳である。こういう事情で、更に後には大久保小学校高等科、次いで土崎小学校に転校を経験することになる。この委任期間中は、土曜の午後に帰宅して家族との生活を味わい、日曜の午後に大和田宅に赴くという実情であった。彼が赴くのを母と弟妹は揃って見送り、名残りを惜しんだという。母親の眼には涙があったことであろう。

35年(1902)県立秋田中学校に進学する。いうまでもなく成績抜群の優秀生徒であった。「ネツ」と渾名されていたというが、それは勉学はいうまでもなく、部活動のボート部でも、熱心至極なので、それによる「熱=ネツ」の敬称であった。

こうして充実の秋中生活が、39年5年生の時に、前年12月14日付で秋田中学の校長に就任していた、後に大政治家になる湯沢出身の添田飛雄太郎に対するストライキ(同盟休校)が起こり、他の「級長クラスの秀才ばかり」(『秋田の先覚』3)と表現される20人ばかりの4・5年生と共に退学処分を受けてしまう。

そもそも18歳程で湯沢に英語学習塾の「麗沢舎」を開き4年近く続けたといい、26歳になるとドイツに自費留学し5年間も貧苦の中で勉強した人物である。校長となっても「黙々として、学校や環境を静観していた」うえで、ある時全校生徒を集めた講堂で、「お前等、これから一生懸命勉強しろ」と一言いい、満場を煙にまいた(『秋田の先覚』)という添田校長としては、「このころ、秋中は大いに風紀が乱れていた、添田はそれを立て直

*秋田県立博物館

すため、厳格をもって当たった。四分の二もの生徒が落第したし、停学、退学の処分された者も多かった。それに対抗してストライキが起きる。また、処分者が出るという具合だった。だが、添田は手を緩めることなく改革を実行した。それによって大いに風紀が改まり、学業成績も上がった」（『秋田代議士物語』・秋田魁新報社）という添田校長のことであるから、生徒代表層の中にいた木村生徒も処分対象になってしまったのであろう。彼は上京して慶應義塾普通部に転学した。校長は「退校させた生徒はみな惜しい者ばかりだが、どこへ放ってもひとかどの者になれるから心配はない」といっていた（『秋田の先覚』）と伝えられるが、まさしく彼もその通りで、明治40年（1907）には第二高等学校に進学し、仙台で学ぶことになるが、中学時代から文学好きで夏目漱石ファンだったから、詩人土井晩翠（本名林吉）教授の英語授業などを楽しんだことであろう。それは受験の際に晩翠の詩集『天地有情』を携帯していたということでも察しられる。

そして次第にドイツ文学に傾倒し、文豪ゲーテに魅せられるようになっていく。ドイツ語のヴェルヘル教師に、独乙文学専攻の意図を固めた動機を聴かれ、日本文学を独乙語訳して、日本文化の真の理解を求めるという方途を語ったというから、単なるドイツ文学への好奇心などということではない、ドイツ文学の持つ哲学性に惹かれたということであり、東北の杜の都仙台の持つ情趣がそれを深化させたということなのであろう。

42年東京帝国大学文科大学独文科に入学する。特待生であった。才能と努力とが両立していたのである。そして大正2年（1913）7月10日首席で恩賜の時計を受けて卒業する。

その年の9月第四高等学校教授として金沢に勤務することとなる。結婚することを考え、秋田の女性がよいと思い、妹の貞に話したらその秋田高等女学校の同級生加藤春代が候補にのぼった。由利郡亀田町の女性であった。結局その秋田美人の女性と結婚することになり、容姿端麗な夫婦は四男二女の親となるが、結婚する時から東大出の貴公子に嫁ぐ夫人は祝福と共に羨望視されたという。そして毎夕食は家族と共にし、終生夫人を「あ

なた」と呼ぶ上品さを失わなかったという。

その生活の基盤には仏教についての求道者の立場を持っていたこともあったと考えられる。長男の名前の「彰一」というのも親鸞の「正信偈」からの命名であるというし、大正9年（1920）に文部省在外研究員として独乙に渡り、ベルリン大学の東洋学科で日本語を教えた際にも、日本人の心と精神文化を伝えようという、二高時代からの目標に向かって実践したのであろうが、「正信偈」を独訳して出版しているのである。「正信偈」は周知の如く、『教行信証』の末尾に納まる本来の呼称は「正信念仏偈」であるが、謹治は『正法眼蔵』への関心と研究も深かったから、格別浄土真宗にだけ没入したとか、曹洞禅に凝ったとかという偏った立場ではなく、日本文化を独乙語を通じて広く伝えようとしたものと考えられる。

この東洋学科は曾て巖谷小波も教育に当たったところであるというが、彼は好きな啄木の歌集などをテキストに日本語教育をしたのである。

日本の心を伝えたいということと共に、留学者としての学習意欲は、「ファウスト」の研究に力を注いだ。ゲーテを知ることによって邁進したのである。多くの文献なども購入したのであるが、第一次大戦後の独乙は、物凄いインフレであって、マルクの価値は下落しており、当然円の価値は日に日に高まった。帰国する12年4月まで、この日本人学者の経済力は充実し恵まれていた。「第一次世界大戦後のベルリンに、最初の日本人留学生として入った彼」と表現されている記述（『秋田の先覚』）も存在する。敗戦による極端なインフレのもたらした厳しい経済生活の冬、採暖のための燃料石炭も、食用のパンなども求め難い、朝と夕とでは物価が倍額にもなるような混乱困窮社会の中で、「彼は円の偉力でぜいたくするかわりに、生活に苦しむ大学の学友に夕食をおごることがしばしばであった」（同上）と記される。いうまでもなく円は書籍や文献資料を求める彼の研究生生活を助けたのである。

帰朝の翌大正13年1月6日東京帝国大学助教授として、母校に迎えられた。彼のゲーテ学が日本でのその方面の研究理解を高速でリードすることになる。若い日から目標としていた「和独辞典」

(独和辞典ならぬ)の編纂にも熱意をもって取り組んだ。一番印象的なのは、その研究が「ゲーテ」の日本語呼称を定めたことであろう。それまで、「ギョエテ」と読んだり、「ゴエテ」と読んだりされていたのを「ゲーテ」であることをば東大教官として明確にしたのである。あのよく知られている「ギョエテとはおれのことかとゲーテいひ」という川柳が、東大学内において生まれたのは、このような段階のことであった。昭和7年(1932)3月教授に昇任する。さらに翌8年1月19日付で文学博士となる。学位論文の題は「若きゲーテ研究」(伊藤書林)であった。この年青木昌吉主任教授定年で独文の主任教授となる。

12年(1937)の春10年余も努力傾注の『和独大辞典』(博文館)が遂に刊行された。昭和7年からは編輯室に通い詰めで編述に没頭しての業績であった。この名辞典を編む過程では、独乙人のセーン夫妻の協力をも得て、正当性を高めたのである。だがこの12年冬は母ナヲの逝去があり、親孝行の教授には深い悲しみを迎えることになる。翌年仙台で講演があり、終えて帰郷し、《ふる里の家のわびしき喜びで迎へたまへる母のなければ》《母まさず父は病めればふる里の山の青きもわびしかりけり》と悲しみを和歌に詠んだ。令弟雄吉教授が「兄はおふくろの子だった」と回想しているような母恋いをいだいた学者だったのである。

昭和15年(1940)『木村・相良独和辞典』(博文館)が刊行された。第四高等学校以来の門下である相良守峯との師弟愛協力の賜物であり、日本学界史の伝統が模範的に生かし示されているといえる成果である。

大学内では「ドイツ文学会」を創立し機関誌「独逸文学」などを刊行し、大学院では「文芸学研究会」を設け、夏分は軽井沢の別荘で一年分の講義ノートを作成し、最新の研究を盛りこんだ卓越した教材で講義を行うという、学生たちの尊敬と信望とを受ける学習指導を行った。だから『若きゲーテの研究』などが出版されると、門下生は先を争って読破したのである。

数ある著書の中で、昭和15年の『日本精神と独逸文化』(弘文堂)に心惹かれる。それは、13

年7月に三国同盟体制にある独乙から「アードレル勲章」を受けたような立場にある教授が、「日本人はなにをやっても日本人の本質を発揮するほかに道はない。ドイツ文学でも、外国のなにであろうと、一所懸命やればそれでよい」といっていた(『秋田の先覚』)ということを知り、それは外から見ていえば、独乙文化・文学をあくまでも日本人の目と心で研究しているという主体性が確立されていて、いわゆる外国(文化)かぶれには絶対にならないということを確定的に示しているからである。またその研究指導は単に大学の職場とか東大生とかに対するものに限られていた訳ではなかった。いうまでもなく求められてのことであるが、空襲下でも渋谷区の町工場主粉川忠とその従業員に私的な講義をし続けたのである。

一面からいえば戦時中は大学生殊に文科系の学生は戦陣や軍需工場に「学徒動員」されて、教室での講義などは殆ど行われていない状況になっていたので、一般市民が対象でも、教師としては講義はしたい心情にあったかもしれないが、敬服に値すると思う。いわゆる「大東亜戦争」勃発後は、文学部の教室は淋しくなり、昭和18年以後は多くの教室は用いられることもなく、教官の研究室さえ閉ざされていることも珍しくなかった。その中で教授は殆ど平常通り研究室で机に向かって仕事をしていた。だから稀に訪ねて来る学生や卒業生があると、燃料さえ無い状態なので構内の落葉や枯枝で、湯を湧かし茶を入れて、ゲーテ研究の談義をしたという。

だが昭和20年8月15日の敗戦である終戦を迎えると、他の研究分野とは異なる打撃が、独乙や伊太利の研究には到来した。単に主人公本人が挫折感のようなものをその身に受けただけではなく、外部から戦時中の「ナチス協力」などとする否定的評価を受ける現実が生じた。勿論それは限られた一部の動向にすぎなかったといえるであろうが、GHQに密告するというような誹謗があったというから、限られた追放策謀であったとはいえ、質的には厳しい衝撃であったものと考えられる。そのような情勢の中で、先に言及した仏教の研究に深い関心を懐く教授は、道元の『正法眼蔵』研究に邁進していたという。

戦後間もない昭和21年(1946)に出版された『完成期のゲーテ』(弘文堂)は名著の評価が高いが、それは戦時中の研究成果であるから、進駐軍占拠によって一時著述を襲った不安感や虚無感のようなものもあった筈であるが、禅哲学の研究などで乗り越えて、正堂堂と世に問うたのであると受け止められる。それと共に教授の戦時中研究が決してナチスの時流などに附和雷同する趣などの無い、日本の学者の立場を自主的に貫いていたものであることを物語っていると認められる。

そういえば、小野一二筆の『秋田の先覚』「木村謹治」の文中には、「私はゲーテを日本人にしようという大望をもっている。それは成功しないかもしれない。けれども聖徳太子や親鸞や道元などが、異国の文化、異国の天才を日本人にして日本の文化を高めた先蹤の例がある。新日本文化のために近代の天才を日本人にする仕事は決して無駄事ではない。近頃は不快な雑音も多いが、ひたすらわが道をいくことにしようと思う」という友人への手紙を引用し、「敗戦を経験した後の求道的な彼のことばとして含蓄がある。そしてその大きな夢にうたれる」と述べているところがある。

この時期の手紙ならいわゆる歴史的仮名遣いであろうし、三人の先人が具体的にどんな異国の天才を日本人にしたというのか、具体的にない向きもあるが、原文を読んだことがないので、このままにして読み取っておくが、引用者の言葉の如く世事の変化に左右されないで、価値ある「わが道をいく」大ゲーテ研究者の、面目躍如たる理念吐露であるといえる。

ゲーテと同じ「83歳まで生きる」といっていた大ゲーテ学者は、昭和23年1月に、戦後研究を本格的に展開しようとする矢先、日頃病気になることもなかった人が、1週間ほど自宅で病臥したのみで、1月13日、定年間近の60歳で、世田谷区櫻上水の自宅で逝去してしまった。惜しい限りである。没後に、あの受講者粉川忠が先生の遺志を継承して、「東京ゲーテ記念館」を渋谷区上通りに、私財をもって設立したのである。そこには粉川が収集した内外のゲーテにかかわる文献資料が保管されるのである。

木内 トモ

明治20年(1887)11月14日雄勝郡湯沢町根小屋町で佐竹南家の佐竹義雄男爵に漢学を講義していた赤須政教を父とし、その長女に生まれた。なお赤須を明須に綴る文献(例えば『秋田の先覚』5)もある。義雄(訓みはヨシタケ〈カ〉)であろう)は本来藩士早川佐五郎の子として生まれ幼名は邦太郎であったが、南家幕末維新期の主たる義誠(ヨシナリ)が20歳で没し、早川家から入って嗣を継いだ義隣(ヨシチカ、同字だが寛永〜元禄期の北家の主の義隣とは別人)が明治20年5月に31歳で没したためにその跡に佐竹エイの養子となり、義隣の長女レイ(明治13年生)を妻とした人である。

義雄は明治33年男爵となるから、20年生まれのトモが幼な心に認識できるような時期まで、南家の主たるべき学習を、恭しくそして厳格に父が若殿に進講していたのを蔭ながら聞き、彼女は忠君尊儒の生活理念を身につけた人物に育ったものと認められる。この原点にこだわったのは、彼女の生涯が、皇室への崇敬心厚く、儒学理念を尊ぶ武家魂で貫かれていたように考えられるからである。多分父の儒学は江戸時代後半に一般化する折衷学派よりも、幕府の正学とされていた朱子学に近い学風だったのであろう。

明治39年(1906)秋田市の木内隆一に嫁いだ。木内家は手形にあり、士族ではあったが、17歳で「戊辰ノ役」戦闘に出陣し、明治10年の「西南ノ役」戦闘にも従軍した木内俊義は、県から公的に受けた「印紙売捌」の権利に基く商売を、23年に「茶紙文房具」の店として開いたのである。このことが木内デパートの創業とされている。隆一が俊義の息子で商売を継承した訳である。隆一は「柳蛇」のち「柳陀」を俳号とする俳人であった。木内の向いの佐々木靴店の場所にあった蛇柳の樹に因んだ号だという。昔柳を伐った作業人が樹木の霊に崇られたという伝説のある日く付きの柳で、やがて俳人柳陀は新樹を植えるという拘りようであった。「蛇柳神社」も建つことになる。嫁いだトモは士族の商法に陥ることなく店員1人の家業に励んだ。実は俳人の夫は、安藤和風の俳句の会で、和風・鹵舟・蝶児・露庵・落葉・東畝・柳陀の「七

星」の一員に数えられる重鎮で、しかも次第に俳句三昧の生活に傾いて行く。

明治42年(1909)1月、火災で店も全焼した。夫は火傷を負い、身重だった彼女が本来の「士魂商才」を最高に発揮する状況となった。しかも苦境で夫は健康にすぐれず、座禅に安心立命の境地を求めるようになり、早朝から参禅することも多くなった生活実態の中で、家業の実際は、「崇仏」の夫から「尊儒」の妻によって切り盛りされるように遷移して行く。当然商売上の苦難なども妻女の上にのしかかってくることになる。

明治末か大正初年の頃と判断されるが、『秋田の先覚』5に、「ある年の冬、丸善(東京の商品問屋)の出張員が来店して、商品代金の支払を求めた。出張員を店に待たせて、幼児を背に折からの吹雪について大林区署(現在の営林局)に集金に行き、取りたてた金をかたくかたく握りしめて帰る途中、凍てついた道にすべって転倒した。そのとき、背負った子どもから〈お母さんお金離すな〉といわれて涙した。経済的な苦しみは、トモの苦難の道の中でも最も長い道のりであった。」という記述がある。特に付言を要しない状況であるが、この文章は1971年発行の書物に記録されているのであるが、文章段階で営林局・営林署と記されていた農林省管轄下の役所が、この転倒事件の時代には、大林区署、小林区署という名称であった訳である。

文章の執筆者は木内百貨店の幹部社員であって、巻末の説明で貴志忠美取締役と肩書がある人なので、なお若干の引用をしてみる。上の記述に続けて「このいばらの道を歩き始めたとき、《下るときは上るときより大事なものだ。一段ずつ降りるようなことなく、一度に一番下までさがってこられよ。一段ずつ降りることなく生活もともども一番下まで降りられよ。そして、再び一段ずつ上れ》トモはこの教えを身をもって体験していかなければならなかった。こうした背景を戦い抜いたトモの指には真珠一粒も光らず、その手は激しい店務と家事に荒れて、しかも力強い手であった」と続き、夫隆一健康すぐれぬことを説き、その次に「トモのこの力強い手が、家業の雑貨店経営を明治・大正・昭和の三代にわたって県内屈指の

百貨店へと成長させることになるのである。」と強調して段落を結んでいる。

また明治42年の火災で全焼の際のことについても、「二十二歳のトモにとって、苦難の道は思いがけない近きにあった。たちまち、三度の食事にも思うにまかせず屋敷に植えたじゃが芋を掘ってゆで、塩をかけて米の代りとし、かゆをすすることもしばしばで、こうした困苦に耐えたトモの底流には、漢学に学んだ《忍》と、人々への《愛》と、そして武門の家に生まれた《不屈の魂》が力強く脈打っていた。《天のまさにこの人に大任を降さんとするや、必ず、まずその人の心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その体質を餓し、その身を窮乏にし、その初志を違わしめ、心を苦しめて、その忍び難きを忍ばしむ》(孟子告子編) 古来幾多の人々がその困難な時代に、この一節によっていかに力づけられたかをトモは考えていた」と論じている。

大正12年9月1日関東大震災が起こった時のことである。他の東北各地の雑貨店同様、木内もこの段階まで東京の間屋から仕入れていた。ところが震災によってその大半の間屋は潰滅してしまった。すなわち秋物の最盛期に仕入れが出来ないばかりでなく、冬物についても見積りは立たず、春から予定していた入荷計画はお先真つ暗の状況になった。彼女は東京以外の然るべき問屋筋からの仕入れを考えて、夜もまんじりともしないで判断をめぐらし、9月3日の早朝行動に出た。午前5時前に秋田銀行の川上支配人宅を訪問し、自分の判断を開陳し、仕入計画実行の多額の資金貸与を申入れたのである。

前引の貴志文献にもこの時の描写があり、「それは当時の木内雑貨店の経営規模をかけはなれた大きな金額であった。常識では考えられない借入れの申しこみなのである。しかしトモの説得には商人の命をかけた気はくがあった。川上支配人はトモの計画に耳を傾け《天下の一大事、商人の一大事ゆえ、私の一存であなたの申しこみを聞きいれよう》と重役会議にもかけずに快諾してくれた」と記している。計画は達成されたのである。

朝に秋銀から受けた借入れ金は山口銀行秋田支店で為替を組んだ。山口銀行は本店が大阪にある。彼女は大阪から商品をば仕入れることを計画した

のである。ところでその山口銀行は、秋田の生んだ大政治家町田忠治が、明治32年から10年間理事を務めた秋田と縁のある銀行であるので、その銀行の金券は大阪の業界で親しみのあるものであったに違いない。トモ女史はその資金を持たせて店員を大阪に派遣し豊富な商品を買付けさせた。

好運もあった。彼女が早朝に川上支配人に願い出たことで、山口銀行秋田支店の手続きは午前9時に完了した。実はこの九時勅令が發布された。全国の銀行に貸出し一斉停止を命令する緊急勅令である。トモはタッチの差で資金を得ることができたのである。派遣店員の努力の成果として、木内雑貨店の店頭には秋物も冬物も充実した商品が並べられることになる。

結果としてこの震災で不振が常識の東北商業界の中で、この年の業績は県内では抜群のものとなった。このような経験が、従業員に「機を逸するな」と諭すようになる基盤となった。

機を見るのは商業の本道であるから名商人といわれる向きは共通にそれを重視したに違いない。従って彼女は小細工をするとか、ましてや不正をも厭わないなどという人柄では全くなかった。人の道に関わる日常的な基準や拠りどころについても、明治人らしい皇室への崇敬心とその表明、旧領主の佐竹男爵家への恭敬の具現など確たるものがあつたし、個人的な神仏への信心、祖先への敬慕など敬虔の限りであった。だから夫も禅信仰に徹し得たのであろう。

その夫の俳句も没入度が深まるにつれて、伝統の五・七・五形から自由律俳句に移って行く。移るというよりは開眼して切り替わったということであろう。俳誌「フブキ」で活躍した。そういえば昨年9月末日扱った伊藤弥太も大館で自由律俳句を嗜んだが、子規の没後弟子河東碧梧桐らが展開した新傾向運動を、荻原井泉水が明治44年俳誌「層雲」にとり上げ自由律や無季題を「俳壇最近の傾向」として評価し推進したことによって、勢いを拡大した自由律である。柳陀がこの傾向を自分のものとしたということは、その生き方を趣味文芸に明確化したものといえるであろう。建碑は昭和18年8月12日というが、千秋公園本丸の稲荷神社前の句碑の「霞はるれば山は常の如くで」

の句を觀れば、門外漢も（自由律とはかくの如きか）と実感する。

昭和2年（1927）、経済的に苦闘を余儀なくされるようなこともある中から、向学の精神を燃やしながらも、貧しくて進学できないような、教育者志望の青年たちに極秘のうちに育英資金を提供し始めた。その恩恵を受けた者は数十人に達するというが、匿名の仕送りだったので、「多くの有能な人材が次々と世に出ていった。かれらはいま学者となり、教育者となってそれぞれの社会で重きをなしているが、かれらはその青雲の志に一灯を献じたトモの名を、ついに知るよしもなかった」（『秋田の先覚』5）という清廉さであった。

昭和7年（1932）「合資会社木内雑貨店」という整った体制を形成した。社運は隆盛に向うのに時勢は昭和12年以来戦時態勢となってしまう。年ごとに物資は欠乏化し、国家の政策も統制を旨とするようになる。殊に「大東亜戦争」と称された米英中仏以下と戦うようになると、販売すべき物品も乏しくなり、閉店とか、帝国石油に店舗を売却しなければとかという気運が生じている中で、彼女は店を堅守し終戦を迎えるのである。

時代は「闇物資」横行の世情となるが、その段階でも「あれくるう世相、道義の低下は至るところにこれをみる。正しきを求めるのは残酷のように思う。しかしながらこの母はおんみらに正しかれとこい願うのだ。人の一生は短い。ことに人間得意の時代はきわめてわずかの間だ。子孫のためにのこすものは物質財産にあらず。“そなたの親しい人であった。かがやかしい一生であった”このことこそは父として親として子のために捧げるのこす貴い遺産であることを、人生の若さの盛りの時代にこころがけられよ」と、店員たちを諭したと先に引いた『秋田の先覚』に紹介されている。

さらに、論すだけではなく、自らの挙措においても、春秋2回の500人を超えるような団体の社員旅行において、自らも楽しみにして必ず同行したが、車中や観光地でカメラを向けられれば、姿勢を正してレンズに対したという。乱れ緩んだ写真はとらせなかった。それは写真は後に残るものなので、心の正しさを現わす自分の正しい姿を残すべきだと考えていたことの表われであった。

社員を大切にすることでは、毎年の大晦日は休日です。正月を迎えるための心を安息にする日であるとし、12月30日を一般の大晦日と見做すことを信条としていた。やるべきことを早く片付け計画的に事を整えるという教訓を含む実践であった。社員と家族を含む木内従業員関係の生活を常に考えて、自分の休息は考えない精進の彼女の耳を離れないのは、「ただいま申し上げることはことごとくお身を以って実行なさること。人生のうち三度は長年申し上げる古の教えをお身を以って行うべき時のござるもの」と父が佐竹南家の若い主に教えていた、「早朝ご進講の父の声」だったというのである。やはり「尊儒」の人生だったということになるのである。

昭和24年(1949)後継者木内強を失い、25年には夫の社長隆一をも失った。自ら社長に就任し、26年「合資会社木内」とする。社長として目指すところは仙台の老舗とか東京・大阪の一流百貨店であった。名実共に木内は高まり充実して行く。

30年(1955)秋田県教育功労章を受ける。いうまでもなく育英活動の評価もあつてのことであろう。34年(1959)には「株式会社木内」に改組する。やがてその活動は38年(1963)藍綬褒章を受章し、翌39年には秋田市文化功労章を受けた。

充実した社長生活と評すべき昭和43年の正月を迎えるべく、42年12月31日を例の如く既に準備完了の日として入浴で身も心も洗い、衣服も整えて庭の観音堂に詣で、昼食を終えた直後、体調が変化し昏睡状態になった。家族や医師の努力も空しく43年(1968)1月3日逝去した。享年81歳であった。墓所は赤沼の本念寺である。

横綱 照国

大正8年(1919)1月10日雄勝郡秋ノ宮村に菅雄吉・トメの次男万蔵誕生する。父は地主である喜左衛門家の分家であった。三男だったので山林の2町歩と田圃の3段(反)歩を分与されて分家したのであった。母は平鹿郡八沢木村の長谷山丹蔵の娘で、養蚕で繭から生糸を紡ぐ名手として、雄勝郡の方でも活躍していた名糸取女であった。長谷山家は、昭和時代雄勝郡から出た有名な国会議員政治家長谷山行毅の親類筋であったという。

同10年(1921)という早い時期に、横堀樺山発電所の電力が引かれて、秋ノ宮村には家々に電灯が点される文化生活が開かれた。この発電所は明治33年(1900)に院内銀山のために開所されたのであったが、その伝統豊かな院内銀山が大正10年に休山となったことによって電力が村の灯として引かれたのである。

昭和元年(1926)万蔵は秋ノ宮尋常高等小学校に入学した。幼い時から体格は良く殊に肥満体であったが、気性は極めて温厚で読書好きな好少年であった。5年(1930)夏に、母の従兄弟で元大相撲の関脇清瀬川だった伊勢ヶ濱親方が、入門勧誘に来訪したのである。もう体重60キロもある体格であったが、闘争などは好まない彼は、相撲など大嫌いだったから、逃げ隠れて親方に会うこともしなかった。

6年4月再び親方は菅家を訪問してその太った体格を愛でて「強い相撲取になれる」と気に入り、今回は突然の来訪だったので逃げ出せなかった万蔵坊やの手に「五円札」を握らせ、返す間もなく、「よく食べて大きくなれ」と車(自動車)で立ち去った。家での養蚕用の桑の葉を山に採りに行ったり、川魚を取るのが得意だったりして、スポーツの能力も秀れてはいたが、相撲取になる気は全くない少年は、「相撲取は金持だなァ」と感心しながらも、自分が相撲をやる気はさらさらなかった。照国より6年遅く生まれた当方の記憶でも、昭和の初年に「十円札」を手に執った経験のない一般人がいたのだから、子供が「五円札」を握るようなことは稀中の稀であったに違いない。

昭和7年(1932)4月1日父の雄吉が盲腸炎になった。当時のことから脚の速い万蔵が走って伯父である大久保医師を院内町の同医院に、往診を求めて夜路を走った。伯父医師は少年の泣き乍らの頼みに、弟を救うべく直ぐ菅家に向ったが、悲しいことに間に合わなかったのである。45歳の働き盛りの父を万蔵は失った。

父が亡くなった後に兄の伝治が満洲事変のために軍隊に応召し家を離れてしまった。万蔵と幼い弟2人を母が女手で育てることになる。彼は子供心にも母を助けようと田畑にも出て母の仕事を手伝った。そしてそこに伊勢ヶ濱部屋の幹部関取で

ある関脇幡瀬川が、親方代理で入門を勧めにやって来た。本姓佐藤で雄勝郡幡野村出身であるが、既に大野家に籍が移って大野邦七郎を氏名としていた幡瀬川は、愛する息子の入門に大反対の母親をなだめ、今は健気にも家の経済のために相撲になろうと決意した万蔵少年を励まして、昭和8年(1933)7月に、ハイヤーを用意して奥羽本線横堀駅まで伴い、駅から親戚など見送りに来た人々に見送られて、上り列車に乗り込んだ。子供のことである当然車中では何度も涙目になった。

優しく幡瀬川は万蔵を慰め、然るべき駅ではホームに降りて菓子袋を買い求めて少年の不安を払おうとした。勿論長い汽車旅のこと故、万蔵の涙は流れることもあり、彼自身も自分の少年時代を想ってか貰い泣きになる場面もあったという。

昭和9年伊勢ヶ濱部屋に入門して「照国」の力士名を貰った。名づけ親は酒井忠正伯爵であった。農林大臣などに就任した名政治家であるが、相撲界でも博物館の初代館長だったり、横綱審議委員会初代会長などを歴任した名士であった。

しかし照国は初め照り輝くことはできなかった。母親心配の通りで荒さもある相撲界の稽古や実生活に馴染めなかったのである。当初身長も体重も不足だったので10年(1935)1月の初土俵となったが、5月の新序としての取組み結果は1勝3敗、体重も増すどころか露骨な闘志の表現もできない身は、問題の体重も減り痩せ細って行く有様であった。母親の従兄弟でもある親方は、「万蔵(照国)。おまえはくんに帰った方がいい。相撲取りには向かない」と宣告したというのである(秋田さがけ平成23年6月26日。築瀬均「秋田が生んだ横綱照国物語」)。帰郷しようと両国駅に向ったものの、帰郷は母の負担を増すことだと悩み、隅田川の流れを眺めながら、橋の欄干に寄りかかり、涙を流しているところに、自転車で幡瀬川が通りかかった。泣いている理由を聞き、自分も小兵で悩んだ三段目時代のことを思い併わせ、母の心配のことも思い起こし、部屋に戻るように言う。

やがて親方を説得し、「おれの弟子になれ」といって、心配する照国に「堂々とやれ、必ず強くなれる」と励ました。言葉で励ましただけではな

い。幡瀬川の自宅に引き取って、夫人静枝の営む「いさご屋」という料理店で、満腹になるような御馳走をしたりして、彼の体格と技の充実に尽力した。「平ぐも仕切」なども徹底的に指導した。

昭和11年(1936)1月には西序ノ口4枚目で3勝3敗、5月には東序二段17枚目で5勝1敗、12年1月西三段目22枚目で5勝1敗。5月西幕下21枚目に昇り11勝2敗の好成績を挙げて幕下優勝をする。

13年(1938)1月東十両13枚目に昇進した。序の口から十両まで1場宛で進んだことになる。新記録の18歳11ヵ月であった。ところがこの場所では右膝関節炎で6勝7敗となり1場所だけで番付が5月場所には西幕下1枚目に下った。しかしここで5勝2敗の成績、14年1月再十両東8枚目に戻り11勝2敗の好成績を挙げた。この場所は名横綱双葉山の連勝記録が69勝で止まった場所である。5月には遂に新入幕を成し遂げる。西前頭15枚目で11勝4敗の好成績を挙げた。

この夏場所はそれまでの1場所13日制から15日制に改まった時であるが、場所前から照国は黄痘にかかっていたのである。しかし幕内の地位を保って家族を喜ばせたいという一念から、医師の休場勧告にも従わなかった。夢中で取り組み10日目まで9勝1敗だったが、無理がたたって3連敗となった。14日目には双葉山を倒した安芸ノ海が相手だったが照国が勝った。千秋楽にも勝って11勝したのである。

ところがその晩のこと腹部に激痛が走り、高熱も出て倒れた。慶応病院に入院する。父と同じ虫垂炎であった。手術は直ぐに行われたが、あんこ型の彼の皮下脂肪が12cmもある厚さで、患部まで30cmもあったので手術は極めて困難であった。そのうえ術後に目覚めた彼は水を呑んだ。それが悪作用して気を失い容態が激変し危篤状態に陥ってしまった。故郷の母親にも電報がうたれた。

母は直ぐに上京し、医師が「駄目だろう」と言っただけという人事不省の息子に、「万死ぬな」と呼びかけて1週間が経過した。幡瀬川は神仏に祈るしかないと考え祈祷してもらった。奇跡的ともいえる状況で、「あばァ」と呼びかけ照国に意識が戻った。母は泣いて喜んだが、入院生活は4ヵ月に及

んだ。母は退院するまで附添って看病した。

退院した彼は医師に相撲を取るのは当分駄目だといわれたのに、10月中旬から巡業に従った。来年少なわち昭和15年（1940）春場所に備えてのことである。問題の手術傷口にはガーゼをし、その上に褌を締めた。赤く血で染ったガーゼは何度も取り換えなければならなかった。気力を尽くしての稽古や取り組みは報いられ、入院で100キロを割っていた体重も115キロまで戻り、1月の春場所にもこの場所から9年ぶりで復活の東西制取り組みでは、東前頭2枚目で12勝3敗の好成績を挙げ、西軍の横綱男女川からは10日目に寄り切って金星を挙げ、3日目にも大関前田山を寄り倒すなどの大活躍で12勝3敗という、優勝の双葉山14勝1敗に次ぐ成績を残した。東西制の対抗成績では東軍173勝・西軍166勝で、照国は優勝旗の旗手に選ばれる平幕最高成績力士となった。病後も傷も精神力で乗り越えたのである。

東軍は双葉山を先頭に大関羽黒山・関脇名寄岩の立浪三羽烏や玉ノ海・佐賀ノ花の二所関異色力士など名力士がいたので、小部屋の伊勢ヶ濱に所属する彼は、この東軍編成の中で身近に名力士から多くを学んだものと認められる。

照国の大病を師匠幡瀬川の舅である浅香山親方は親身の心配をしたのであるが、同じく心配していた幡瀬川も安心したのかこの15年春場所後現役引退する。親方「千賀ノ浦」となった。照国は5月の夏場所には小結を跳び越えて東張出関脇に昇進するが、この春場所の後で、秋ノ宮出身の大実業家（当時帝国鉱業開発社長）の菅礼之助は、「日本一の強い腰の力士」照国の出現を喜び、「照国の本名は菅万蔵。私の名前も菅。遠縁なんだ」と秋田魁新報紙上に語った。恐らく秋田県人の総べてが照国を誇りに思ったことであろう。

関脇の5月場所21歳4ヵ月の照国の体重は128キロで「奇跡の腰」を誇った。西軍の打倒照国の攻勢にもめげず11勝4敗だった。双葉山が途中休場をしたりして西軍が勝利を占めたが、照国は東軍の三役力士唯一の勝ち越しを成し遂げた。この夏場所後大阪準場所を経て大陸巡業に出た。奉天場所では14勝1敗だったが、帰国後の博多場所では15勝全勝だった。

帰国後新潟から秋田に立寄り、秋ノ宮の実家にも帰った。兄も満洲から除隊し帰っていた。ただ母が高血圧を患っていた。心配する彼に母は万蔵が大関になるまでは死なない旨を述べた。彼は蓄えていた賞金などを実家に提供する申出をしたが、母も兄も受けなかった。だが照国は兄に実家の田地を増やす買収資金にしてと申し出てそのようになったという。

各地巡業を終えて12月半ば日本橋浜町の千賀ノ浦部屋に戻った。浅香山親方が待っていた。ところが12月30日昼近く「ハハシス」の電報が兄から届いた。27日母は53歳で脳溢血で亡くなったのである。付き人3人を伴い急ぎ帰郷したが、雪の中の郷里で彼は母にすがって号泣するしかなかった。すべての根源であった母を失い22歳の照国は悲しみの中で昭和16年1月場所のために、場所開幕2日前の1月8日に帰京した。

春場所初日の朝、疲労と風邪で熱もある中で四股を踏むと古創のあった右膝関節が痛み出した。浅香山親方に呼ばれた医師は4～5日休めばよくなるといい、彼を愛する浅香山は今場所休場を提案したが、母を思った照国は信念的にも母に守って貰って取ると決め、熱ある桜色の体で土俵に上ったのである。心で体にうち勝つ人生と言える。

その必死の姿を見て仕度部屋で隣に荷を置く双葉山が、「大丈夫か、注射は効いたか？」と心配した程の周囲の関心事でもあった。泣いて母呼ぶ連日の努力は、それまで3連勝中の前田山との取り組みに、春日野検査長（元横綱栃木山）の変な物言いが付き、星1つ損をしたような場面もありながら、12勝3敗の成績を挙げた。

次の場所即ち昭和16年（1941）5月の夏場所は14勝1敗の西軍大関羽黒山優勝、それに次ぐ13勝2敗が同じ西軍横綱双葉山と照国、東軍小結玉ノ海という結果で、西軍大勝利だっただけではなく、羽黒山の横綱昇進と照国の大関昇任が5月24日午前10時20分に通知され、正午のラジオニュースで放送された。22歳4ヵ月、三役を3場所保ち36勝9敗という堂々たる裏づけであった。だが照れ性の彼はお祝に応えるのが恥ずかしかったのか、また今回も前場所のように当て外れになる不安があったのかであろう、暫く姿を現さ

なかった。新大関は5月27日に帰郷した。母の墓前に報告もし、秋田市も訪れ、湯沢町長主催祝賀会にも出席した。また、この年千賀ノ浦の養子になり大野姓となった。

昭和17年(1942)1月大関最初の場所は男女ノ川に勝ち安芸ノ海に敗れたが、12勝3敗で14勝の双葉山、13勝の羽黒山と安芸ノ海に続いた。ところが男女ノ川が引退したので協会は、両軍の力を並べるべく、伊勢ヶ濱部屋を西軍に高砂一門を東軍に入れ替えた。照国は淋しかったという。

5月場所6日目に前頭輝昇に敗れ、11日目に関脇玉ノ海にも敗れたが、173センチ135キロになっていた照国は、14日目に本場所初顔合わせで双葉山に下手投で勝ったのである。2敗で同成績のため上位の横綱が優勝となったが、5月25日番付編成会議で照国と安芸ノ海は全員一致の横綱推薦を受けた。大関2場所で横綱になったのは栃木山・双葉山に次いで3人目だった。しかも双葉山でも26歳だったのに彼は24歳(満23歳4ヶ月)だったから「驚異的新記録の若い横綱」(毎日新聞)と讃えられた。白い餅肌を桜色にして勝負をし、「桜色の音楽」と表現され、錦絵のような土俵入を備州山の露払い、清美川(十文字町出身)の大刀持ちで行い、「絵になる相撲」で錦絵のようだと言われ、その才能を謳われた。きっと母親のことを思ったに違いない。秋田県でも5月26日の「秋田魁新報」などで「万歳」「おめでとう」が溢れたことが報ぜられている。

昭和18年(1943)1月場所では174センチ161キロの堂々たる体躯で双葉山に1敗しただけの14勝。戦時深刻化で「相撲協会勤労報国隊」も結成された。5月の夏場所手首を捻挫した。14日目羽黒山に勝ち千秋楽双葉山と熱戦したが、手首の痛さで敗れ12勝3敗で終わった後、6月から9月まで軍慰問の朝鮮・満蒙・北支の巡業に出た。帰途南満洲鉄道の車中機関車の煤煙が眼に入り両眼充血の重症となった。蒸気機関車の煙が目に入る禍は多くの人を経験したが、大陸のそれは極端だったのであろう。帰国眼科医に受診しても有効治療は得られなかった。角膜炎・顔面神経痛から糖尿病も誘発、左膝の古傷も再発という苦境を精神力で、19年1月場所は千秋楽に双葉山を寄り切り

11勝4敗で終わった。場所後2月国技館は軍需工場に接収される。

昭和19年(1944)5月場所は後楽園球場での野外場所となった。期間も10日間、病軀で堪えて9日目には双葉山に勝ち面目を保ったが、20年1月場所は野外では寒冷のため19年11月に繰り上げ晴天10日で行われ、左肩を痛めた。この11月に東京大神宮で26歳の照国は、浅香山親方の孫大野利枝18歳と結婚した。空襲も激しくなった時期なので家庭は山梨県に疎開した。20年(1945)3月の東京大空襲では大野家持家3軒が類焼した。だから千賀ノ浦改め楯山親方の伊勢ヶ濱部屋は、終戦後に中野に移るまで藤沢市に移転していたのである。中野には湯沢の両関酒造の社長別邸の広い屋敷があった。中野から両国に移ることができたのは23年頃である。それまで20年6月場所5勝2敗、11月は9勝1敗などの成績で、体は60キロも痩せていた。

占領時の総司令部は国技館をメモリアル・ホールと改称していた。昭和21年(1946)11月ここで秋場所が13日間行われたが、6日目から休場。19日双葉山引退大相撲土俵入では露払いを務めた。この年長男和佳勇(わかお)が生まれ、やがて3男1女に恵まれる。体は復調せず、昭和24年(1949)1月春場所全休という段階では引退もささやかれた。千代ノ山・力道山・東富士・吉葉山などが人気力士になって来た。5月場所は12勝3敗だが膝を痛め、25年1月は2勝で休み、神に祈り無心で猛稽古9月場所では13勝で待ちに待った遅い初優勝をした。

昭和26年(1951)1月場所では待望の全勝優勝を成し遂げた。昭和18年の双葉山以来の快挙だった。27年は負傷と糖尿病と顔面神経痛などの持病で5月場所全休、28年1月場所3敗12休で引退となる。横綱在位10年。幕内計271勝91敗、三役の勝率は双葉山86.7%に次ぐ81.3%。その双葉山に3勝2敗。これらの成績は故障を抑えながらの真面目な努力の賜物である。

昭和36年(1961)二代目伊勢ヶ濱襲名。44年弟子大関清国優勝で大いに喜ぶが、49年夏横手で入院したりもする。52年(1977)3月22日大阪で協会理事会の帰途逝去する。享年58歳。